令和６年度第７回「知事と一緒に生き活きトーク」発言要旨

１　テーマ：中山間地域における農業者の確保・育成とその課題
２　日　時：令和７年１月 22 日（水）　15:00～16:20
３　場　所：まなび広場にいみ　(新見市新見 123－2)
４　参加者：中山間地域で就農、移住定住を支援する組織の代表者など６名
５　知事挨拶

中山間地域で就農、移住定住支援に取り組んでいる皆さまから、新規就農者の確保育成や受け入れに必要な取り組みや課題解決に有効なアイデア等についてお聞きしたい。

６　発言内容等

【自己紹介・活動紹介】

・井原市青野町でぶどうを栽培している。井原市のぶどうは、昭和 30 年代にベリーＡの試作から始まり、県営の灌漑事業によるため池のおかげで安定したぶどう栽培が可能となり、そこが新規就農者へのＰＲポイントとなっている。
・行政職員として、新規就農者の確保・育成に関わる事業を担当している。昨年大阪で開催された「新・農業人フェア」がきっかけで、就農に向けた話が進んでいる。
・49 歳の時に親の跡を継いで就農（トマト）した。高梁市は４カ所あった選果場を１か所に統合したことで、労力やコストを削減することができ、規模の拡大が進んだが、現在は、他地域同様、高齢化が急激に進んでおり、産地の維持が難しくなっている。
・平成 20 年にトマトやぶどう栽培を目指す新規就農者を受け入れ、移住・就農までのサポートを行うことを目的に、平川村定住促進協議会を設立した。これまで、11 組が移住・就農し、全員定住している事をアピールにつなげていきたいと考えている。
・令和４年５月に地域運営組織「豊永支え合いネット」を設立した。森の芸術祭で満喜洞とふれあいセンターの会場管理を受託し、多くの方に訪れていただいた。新見市豊永地区は高齢化率が 63%と高く、人口減少が課題だが、ブランドぶどうの豊永ピオーネの産地としての一面も持つ。そのプラス面に注力していきたいと考えている。また、放課後児童クラブの立ち上げにも関わり、若い世代の後押しをしている。
・脱サラしてぶどう農家として地元にＵターンした。若手が高齢農家をサポートする等、産地を守ってきたが、若い世代も年齢を重ね、今までできていた若手が高齢農家をサポートすることも難しくなりつつあると感じている。

【今後の取り組み・課題、必要な支援など】

・約 20 年前に、繁忙期の人手不足解消のため「猫の手会」を設立した。農家からの依頼を受けて農作業の補助を行い、依頼者は会員に賃金を支払う仕組みになっている。ベテラン会員が新規会員を指導するなど、組織内でノウハウが共有されている。また、病気などで作業ができない農家の代わりに作業を行うなど、農家の様々なニーズに対応しているが、ぶどう栽培の繁忙期は集中するため、指導に時間を割くことが難しい。

・農業委員会へ後継者不足で管理できなくなった農地を無償で良いので引き受けてくれる人がいないかという相談が増えている。新規就農者と地域関係者との橋渡しを継続し、就農希望者の増加を目指していきたい。また、就農後のサポート体制の充実にも取り組んでいきたい。

・産地継続のために、新規就農者の確保・育成に力を入れていきたい。地域に幼稚園や小・中学校がないため、送迎等、中山間地域ならではの問題があり、若い世代は子育てとの両立が難しく、収入が安定しない。Ｕターン就農者もいるが、家族の支援を受けられる地元出身者と比べて条件が異なるので解消していきたい。農地確保は比較的容易だが、住居確保が課題で、空き家はあるものの、田舎の家は大きすぎて、持て余してしまうようだ。

・中山間地域という立地がネックなのか、新規就農者の問い合わせはあるものの、定住には至っていない。一方で、新規就農者が自らＳＮＳ等で情報発信してくれることで、共感を得て繋がりが広がっている。また、地球温暖化による収量減少や品質低下への対策が必要だが、遮熱シート等の資材高騰が負担になっている。就農希望者や子育て世代への支援、繁忙期の臨時雇用者への交通費補助があればありがたい。

・近年、新規就農やUターンで戻ってくる人が増加傾向にあり、高齢化によって耕作が困難になった農地を、どのように新規就農者につなげるかが課題となっている。人口減少という大きな流れに抗うことは難しいが、豊永ピオーネの産地としての強みを活かし、地域活性化に繋がるような活動に力を入れていきたい。

・世代交代が進んだが、その世代も高齢化しつつある。また、多くの就農者が入ってきても、技術を伝える人材の確保が難しい。高齢の農家の中には、将来的に農地や施設を譲りたいと考えている人もいるため、新規就農者とうまくマッチングできれば初期投資軽減に有効だと思う。

7　知事まとめ

　世代交代の難しさ、就農希望者と地域とのマッチングの重要性、就農後の経営の安定化など、様々な課題や可能性について認識を深めることができた。岡山県の農業が持続可能な産業として発展していくために、関係者と協力して取り組んでいきたい。